広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第55号　2006　373－381

子育てにおける親の省察モデルの検討

朴　信永・杉村伸一郎

（2006年10月５日受理）

A model of parental reflection in child rearing

Shin-Young Park and Shinichiro Sugimura

Cognitive process in child rearing has been studied separately by theme or domain, which consequently makes it difficult to get an overall perspective of cognitive process because findings of respective studies are not associated with one another. For that reason, in this study, a three-layer model of reflection was suggested with intent to systematically grasp cognitive process in child rearing and sort out past researches for the purpose of examining the issues to be studied in the future child rearing researches.

Key words: parenting, parental cognition, parental reflection, parental monitoring
キーワード：子育て，親の認知，親の省察，親のモニタリング

子育てにおける親の認知過程は，テーマや領域ごとに別個に研究されてきた。そのために各研究の知見が関連づけられておらず，認知過程の全体像を把握することが困難である。そこで本研究では，子育てにおける親の認知過程を体系的に捉えるために省察の３層モデルを提案し，これまでの研究を整理することによって，今後の子育て研究に関する研究課題を検討することを目的とする。

近年，子育て支援のあり方を考える上で子育てにおける親の認知が注目を集めている。親が子どもを育てる際にとる態度や行動は，以前考えられていたほど一方向的に子どもの発達に影響を及ぼさない（朴・杉村，2006）。子どもから親に向けての影響もあり，両者の行動には親子双方の認知が介在する（菅野，2001）。Goodnow & Collins（1990）は，子どもに関する親の目標，考え方，信念を指す親の認知が子どもの発達に及ぼす影響を明らかにした。また，Bugental（1992; 1993）は，子どもに対するコントロールより自分自身に対するコントロールに難しさを感じている親に注目し，このような親は，ネガティブな感情状態，悲観的な認識をもち，子どもを脅かしてしまう育児行動に関連したスキーマをもっていると述べた。実際に，自分自身に対する低いコントロール群の母親は，子どもに一貫性のないメッセージを発し，感情的に乱れ，それは虐待や威圧的なしつけにつながる可能性が高い（Bugental, Blue, & Cruzcosa, 1989）。Grusec, Rudy, & Martini（1997）も，育児方略に相当の影響力をもっている親の認知に関して探ることは，子どもの社会性の発達や価値の内面化を明らかにするのに不可欠であると述べ，親の認知と感情を子どもの発達の規定要因の一つとして位置づけている。

親や保育者が日々の育児・保育とそれに伴う自分の認知や感情をどのようにとらえるのかということは，親のメタ認知（Main, 1991; Fonagy, 1996; 窪田，2002）や保育者の省察（宮内，1998; 高橋，1998）として研究が行われてきた。詳細については，朴・杉村（2006）を参照されたい。このような研究は，親がメタ認知的モニタリングを通して適切な育児態度をとることができ，子どもと安定的な関係を築いていくことを示した点において意義があると考えられる。ここでメタ認知的モニタリングを通して適切な育児態度をとるということは，子どもの思いが親自身と一致していないことを明確に自覚できる点において重要な意味をもっている。

また，子どもが何をし，どのように考え，どのように感じるかを注意深く観察すること，すなわち親のモニタリング（Parental Monitoring）に関する研究は，主に欧米で非行や犯罪の低年齢化が進み注目をあびる

ようになった。親のモニタリングは子どもの安全と関連しており（Peterson, Ewigman, & Kivlahan, 1993），親のモニタリングにより子どもの非社会的行動（McCord, 1986; Crouter, MacDermid, McHale, & Perry-Jenkins, 1990; Weintraub & Gold, 1991; Sampson & Laub, 1994）や，薬物乱用（Chilcoat, Dishion, & Anthony, 1995; Chilcoat & Anthony, 1996）などが減少したと結論づけている。まとめると，親がしっかりとモニタリングを行っている家庭の子どもは非行に走らず（Hayes, Hudson, & Matthews, 2004），子どもがどのように考え，どのように感じるかを知ることは子どもの健全な発達において重要な役割を果たしていた。また，子どもの思いが自分とは違っていることを知っている親は，子どものためにどのような育児方略でも受け入れる準備が備えられていた（Grusec ら，1997）。

以上のように，子育てに関する研究においてメタ認知やモニタリングといった概念は，多くの実証的研究を刺激し，現在でも臨床心理学・発達心理学などの領域で応用的な研究を生み出している。しかし，子育てや保育における省察，メタ認知，メタ認知的モニタリング，モニタリングなどの概念は包括的で曖昧であり，研究テーマや領域によって恣意的に使われている。また，各概念間の関連性や違いについて十分に論議されておらず，それぞれ別個に扱われるか，広義にまとめられることが多い。そのために子育てにおける親の認知過程の全体像を把握することが難しくなっている。このような混乱の原因は，以下の点が明確に区別されていないことによると考えられる。

第一に，概念が示している時間の幅の違いが明確に区別されていない。保育においては実践中の気づきも，実践後の振り返りも省察の範囲に入れている。吉村・吉岡・尾形・田代（1996）は，保育者の省察の機能が様々に論じられ，また「成長」「省察」という言葉が多用されてきたにもかかわらず，双方とも曖昧な認識の中で随意な解釈によって言及されてきたと述べている。保育カンファレンスに関する研究においても省察過程が重視されているが，その中には，保育当日の出来事に関する省察もあれば，保育者が長らくもち続けている保育観のゆらぎを省察ということもある。実践中の省察，保育後の省察という区分もあるが，価値観が変わるような比較的深い省察と，子どもと向き合っている場での気づきの認知過程における違いについてはほとんど語られていない。したがって，保育者が省察するように言われても，具体的にどのようにすればよいかわかりにくく，また，保育者に何らかの変化が起きた場合も，省察の中身が曖昧な言葉で説明されたことになり，研究者も保育者も思考停止に陥ってしまう。

また，Hayes, Hudson, & Matthews（2003）のように先行研究におけるモニタリングの定義の不一致を指摘し，親のモニタリングを子どもと向き合っているその場でのことに限っている研究者もいる。彼らはモニタリング・エピソードの中の親子の行動から親のモニタリングのプロセスモデルを提示した。中学生の子どもとその親を対象にしたモデルの４段階は次のようである。①自由時間前のモニタリング：子どもの自由時間前に，親が子どもにどこへ行くつもりか，何をしようとしているのか，誰と何時までいるのか，などを聞く。②自由時間後のモニタリングと子どもの自己開示：子どもが家に帰ってきた時，親から子どもに自由時間のことについて尋ねるか，子どもが自ら自由時間の間に起こったことを話す。③親の反応：子どもの答えに応じ親の意見を述べたり小言を言う。④子どもの反応：抵抗するか，あるいは従う。このような親のモニタリングと子どもの反応が相互に影響を及ぼし，次のモニタリングエピソードにつながっていくという循環的な過程が統計的にも確認された（Hayes ら，2004）。しかし，様々な時間の幅における親のモニタリングのメカニズムの解明までには至っていない。

第二に，認知のレベルや，判断材料となる情報の違いが明確に区別されていない。例えば，氏家・高濱（1994）は，３人の母親の適応過程について追跡的な研究を行い，その結果，問題の解消は当該の問題の消失によってではなく，知覚レンズ（Lazarus & Folkman, 1991）の変化によってもたらされることを明らかにした。具体的には，ケース１では，双子の行動の変化がきっかけとなり，嫁－姑という役割についての彼女の枠組みがゆるみ，ケース２では，子どもと夫が彼女の期待から大きく外れた行動をとり，固い枠組みがゆるんでいった。また，ケース３では，自分自身の発作を契機に，ものの見方や行動の枠組みが変化した。

彼らの研究で，ケースごとの出来事が個人に与える影響は，その出来事やそれと自分との関係を個人がどのように評価するかによって異なった。しかし，研究の問題点として挙げられているように，対象者たち３人とも心身のつらい状態から立ち直ることができた詳細な理由については明らかにできなかった。立ち直りの理由や過程を検討していくためには，知覚する現実の内容とともに各々の評価のレベルの違いを十分に整理する必要があると思われる。また，ケース３の母親の関心はもっぱら自分自身に向かい子どもに拒否的でさえあったことから，正しい評価のためにはその材料

となる情報が偏らず，自己に関する部分，子どもに関する部分などをバランスよく使うことが重要であった。このことから，親がもっぱら子どもの行動だけに注目しているのか，あるいは自分自身の思いや感情を含めているのか，夫や他の人からの意見や情報を参考にしたうえで判断しているのかによって，その過程や結果が違ってくると考えられる。自分の子育て観をしっかりもち省察をよく行う親だとしても，日々の子どもの変化に関する気づきや認識が足りないと，健全な親子関係を築きにくいであろう。加えて，親子が社会から孤立しがちな現代社会では，他人から見た我が子の姿が自分の子育てを振り返る上でより重要な情報源になっていくのではないだろうか。

省察の３層モデルの構成

以上のように，従来の研究では子育てにおける親の認知過程に関する概念が整理されておらず，その要因は，概念が示している時間の幅，認知のレベル，認知の対象となる情報などが明確に区別されていないことにあると考えられた。そこで本節ではこれらの問題点を考慮し，子育てにおける親の認知過程のモデルを提案する。

筆者の知る限り，子育てや保育に関する研究で，時間の幅と認知のレベルという観点から認知過程を整理しモデルを提示している研究は見当たらない。そこで本論文では時間の幅と認知のレベルを考慮した梶田（1987）の体験学習のモデルを参考にしながらモデルを構成する。体験学習のモデルでは体験過程の時間的推移を，体験の継続，体験から直接もたらされる認知的要素，その認知的要素からさらに抽象化された認知的要素，という３つのレベルに分類することにより把握している。第１のレベルは具体的経験であり，第２のレベルは具体的経験を対象にして考え，その結果として引き出した具体的認識，第３のレベルは信念ともいえるものである。

そして，この３つのレベルは相互に作用しあい，時間の経過とともに，レベル１では具体的経験が増加し，レベル２とレベル３では，それぞれの認知的要素が変化していく。その変化の中で，レベル３の認知的要素は個々の体験の統合されたものになるとともに，レベル３の一般的・抽象的認識は，レベル２の個別的・具体的認識を媒介として個々の体験に作用すると考えられている。

このモデルは，学習・指導体験とその発達を考察するために考案されたものであるが，本研究の対象である子育てにおける親の認知過程にも適用できるであろう。しかし，その際には，いくつかの点を補ったり修正したりする必要があると思われる。大きな問題点は以下の２つである。

第一に，体験学習のモデルでは，具体的経験を最初のレベルとし，それを対象にして考え引き出された認識を第２のレベルとしているが，このような仮定では，具体的経験の個人内や個人間における変化や違いを説明できない。日常の様々な出来事の中で具体的経験として残るものとそうでないものがある。同じような出来事でも気づくこともあれば気づかないこともある。同じ出来事を見ていても気づく人もいれば気づかない人もいる。子どもと接している時に気づいたことだけが思考の対象になり，気づかなかったことは思考の対象になりにくいことを考えると，レベル１の具体的経験を，日常の出来事とそれに対する気づきという２つのレベルに分離して考える必要がある。

そのために，本論文では，日常の出来事を「外的情報」，それに対する「注意・制御」と「知覚」を含む循環的な過程を「１次的省察」，その過程において産出されるものを「気づき」とよぶことにする。「気づき」は産物であるとともに，次の過程において思考の対象になる可能性があるので「１次的情報」となる。そして，これより上の過程で産出されるものは梶田（1987）に倣って「個別的認識」，「一般的認識」とよぶ。しかし，体験学習のモデルでは，認識の過程であるレベル間の相互作用を単に両方向の矢印で表示し，その機能を内化と外化，抽象化と具体化というように一般的にしか記述していないので，より洗練されたものにする必要がある。

そこで本論文では，それぞれの過程を循環的なものと考え，「気づき」に対する「分析・評価」と「計画・予測」を含む循環的な過程を「２次的省察」，その過程において産出されるものを「個別的認識」とよぶ。さらに，「個別的認識」が「２次的情報」となり，それに対する「洞察・抽象化」と「見通し・具体化」を含む循環的な過程を「３次的省察」，その過程において産出されるものを「一般的認識」とよぶことにする。「一般的認識」は，通常，子育て観，子ども観，発達観とよばれている。以上を図示したものが図１の「省察の３層モデル」である。

体験学習のモデルの第二の問題点は，認知的要素の一部として学校で学ぶ知識なども想定されているが，それがモデル上に明示されておらず，体験以外の情報源がほとんど考慮されていない点にある。子育てにおいては，子どもを育てている親同士のコミュニケーションや子育てに関する本や雑誌からの情報も利用されている。そこで，これらを総称し「コミュニケーショ

ン」とし，先の「省察の３層モデル」に描き加えた。その際，コミュニケーションの内容には，「気づき」，「個別的認識」，「一般的認識」の３種類とも含まれると考えられるので，それぞれのレベルにおいて，聞く・話す，読む・書くといった他者との循環過程を描いた。

情報源に関しては，もう一つ考慮すべきことがある。それは今回新たに付け加えた「外的情報」に関することである。子育てにおいて，「外的情報」としての日常の出来事は，親と子の相互作用をとおして起きるので，親だけに関する情報と，子どもだけに関する情報というように分離することは困難である。しかしながら，概念的には明確に区別することができ，実際これまでの研究においても，親のメタ認知に関する研究では親に関する情報を中心に，親のモニタリングに関する研究では子どもに関する情報を中心に扱ってきた。

そこで本論文では「外的情報」を，親自身の態度や言動といった「親自身に関する情報」，自分の子どもの表情や行動といった「自分の子どもに関する情報」，他の親の子どもへの接し方や他の子どもの様子といった「他の親や子どもに関する情報」の３つに分けて考えるとともに，モデル上でも図１のように分けて表示した。この３つの側面は，「外的情報」とそれに対する「１次的省察」のレベルだけでなく，より上のレベルにおいても区別することはできるが，レベルが高くなるにつれて３つの側面が統合されていくと考えられる。

ここで改めて「省察の３層モデル」を見ると，日常の出来事の中にある「外的情報」に対して「１次的省察」を繰り返すことにより「気づき」のプールができ，そして，「気づき」を「１次的情報」として「２次的省察」を繰り返すことにより「個別的認識」のプールができ，さらに，「個別的認識」を「２次的情報」として「３次的省察」を繰り返すことにより「一般的認識」のプールができる様子がわかる。この３つの循環過程は連動しており，「気づき」「個別的認識」「一般的認識」の順に下位のレベルの産物が統合されたもの

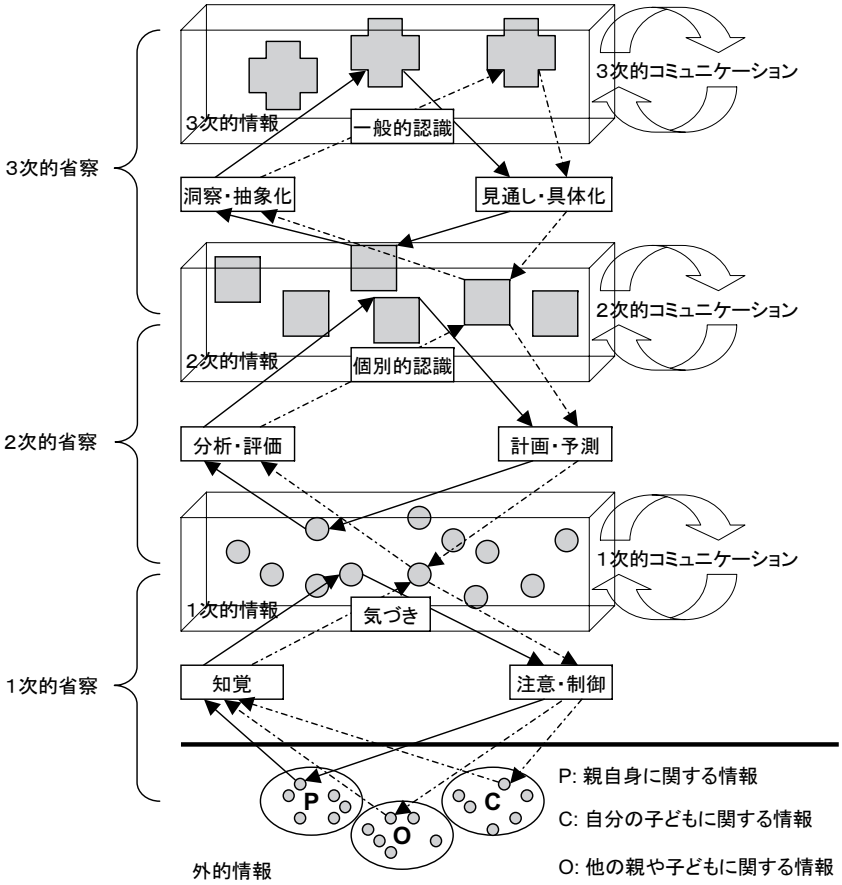


図１．省察の３層モデル

になっていると同時に，３種類の産物はシェマ（スキーマ）のように働き上位のレベルの産物が下位のレベルの産物（情報）に対して選択的に注意したり予測を行ったりする。また３種類の産物は「コミュニケーション」における情報にもなる。このように，「気づき」「個別的認識」「一般的認識」のプールにおいては，省察やコミュニケーションをとおして情報が量的に増大するだけでなく，レベル内とレベル間で情報が相互に関連づけられ質的・構造的にも変化すると考えられる。また，その一方で，本や雑誌などから得た一般的な情報が，それに対応した個別的な認識が伴わずに１次的省察に利用されたりする場合のように，間の過程が存在しないこともあると考えられるが，このような省察過程はモデル上にうまく表現されていないので，留意する必要がある。

では次に，省察の３層モデルの中で先行研究で用いられた省察，メタ認知，モニタリング等の概念が，どのように位置づけられるのかを検討することにしよう。まず，保育現場や保育研究において用いられることの多い省察に関して考える。安見・秋田・鳥井・小林・寺田（1997）は，日々の保育の中で「今日の今」を瞬時に読みとり理解し再構成していく事と，後にカンファレンスを通して子どもの成長を振り返ることで，その時の援助してきた行為に対する思いや方法が意味を持ってはっきりと示されると述べた。また，吉村・吉岡・尾形・田代（1996）は，保育当日の省察から，翌日の実践，翌日の省察，さらに期間を経ての省察の循環経路を示した。よって，日々の保育から後のカンファレンスまでの省察を描き，またその循環過程を重視していることがわかるが，このような実践の中でどのような認知的営みが行われるのかについては明確ではない。保育当日の省察は「１次的省察」に，期間を経ての省察は「２次的省察」あるいは保育観レベルにおける「３次的省察」に分けて具体化することにより，カンファレンスの内容もより充実すると思われる。

また，親のメタ認知と内省的注意力（Self-reflective Observation）に関する研究（Main, 1991; Fonagy, 1996）では，自分自身の考えに対する表象的特性の理解に欠けていると，子どもと安定的な愛着関係を築きにくいことを明らかにしている。しかし，この研究に関しては，自分自身はもちろん他人の内的状態に関するものまでメタ認知の対象としているものの，メタ認知と内省的注意力が混用されていて系統的な定義が不充分であることが指摘されている（朴・杉村，2006）。その大きな理由として，日々の子どもの変化に関するモニタリングと，自分の育児へのメタ認知の各要素がどのように結びつくのかという，認知過程の仕組みを明らかにするまでには至らなかったことが挙げられる。それに比べ，親のモニタリング研究では，子どもの変化に関するモニタリングをより具体的に示そうとしてきたが，モニタリングの繰り返しによってモニタリング自体のレベルが上がっていく過程を見逃してしまった。たとえば，子どもの表情や態度・言動をモニタリングすることは下位レベルといえ，子どもがどう感じ，どう思っているかということに関するモニタリングはメタ認知的なモニタリングとなるが，その違いに関しては取りあげてこなかったのである。

最後に，Gibbs（1988）の省察モデルを取り上げる。省察モデルでは，①出来事（Description）②感覚（Feeling）③評価（Evaluation）④分析（Analysis）⑤結果（Conclusion）⑥計画（Action Plan）の循環過程を提示している。たが，行為中の省察（Shön, 2001）と事後の振り返りの区別は考慮されていないため，「１次的省察」である日常生活での気づきが「２次的省察」である評価・分析まで拡大されたモデルとなってしまった。日々の出来事は，省察をとおして関連づけられ抽象度の高い認識に凝縮されていく。その中で個々の下位情報の質により省察のレベルが違ってくると思われる。省察の３層モデルのように「外的情報」と省察のレベルを３つに区別することにより省察に関する系統的な定義づけが可能になるであろう。

省察の３層モデルの利点と今後の課題

次に，省察を３つのレベルと情報をもつ循環過程とすることによってどのような利点があり，そこからどのような課題が見出せるのか検討する。第一に，循環的な過程により上位レベルが構成されていく省察の３層モデルを想定することにより，親子の直接的なかかわりの場面における「１次的省察」とその結果を基にした「２次的省察」の違い，さらに「２次的省察」とその結果を基にした「３次的省察」の違いを明らかにすることができる。Stattin & Kerr（2000）の研究では，以前モニタリングが親の注意深い観察行動とされてきたのとは違い，実際多くの研究で測られたものは親の知識であったことが示された。その原因は簡単にいえば，各々の研究者が指し示すモニタリングの範囲が観察（tracking）から，子どもの関心事や気持ちに関する知識まで広く，またそれらを区別しようとする取り組みもなかったことにある。その後，Kerr & Stattin（2000）の研究では，14歳の中学生1,186名とその親を対象にした研究で，中学生が社会に適応するには，親の観察行動だけでなく親の知識と，より密接に関わっていることが明らかになった。省察の３層モデルに基

づくと，前者は「外的情報」の収集に当たり，後者は「１次的情報」のまとまりとして分けて考えることができ，「外的情報」を基に上位の意識化過程が行われたことがわかる。

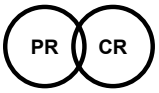
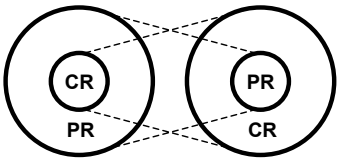
本研究で提案された省察の３層モデルの「１次的省察」では，日常の経験を基盤にモニタリングすることが前提とされているので，モニタリングを通した省察から高次の省察まで段階的に上がる過程を表している。このようなモデルを考えると，高次の省察のためには下位情報が必要なことや，下位情報が多いほど次のレベルの省察が豊かになることなど，認知過程における質的・量的な違いを明示することができる。さらに，以前あまり取りあげられてこなかった，「他の親や子どもに関する情報」と，他者とのコミュニケーションや育児情報を設定することによって，子育ての日常場面をより忠実に再現したといえる。

第二に，省察の３層モデルを用いると親が，子どもを育てると同時に，自分にも目を向け成長していく姿を具体的に記述することができる。すなわち，今まで注目されてきた子どものことだけでなく，親自身のこと，また親子の関わりにおける様々な出来事，さらに他者とのコミュニケーションからの気づきをも含め，発達していく親の姿を省察のレベルに合わせて考察することが可能になる。

特に，「親自身に関する情報」と「自分の子どもに関する情報」の２つに着目した場合，親が視点を自分自身に置く場合と子どもに置く場合，両方がどのように合わされば親は子どもと良好な関係を保つことができるのだろうか。そこでは，親が自己の視点に気づき，子どもの視点を内在化しながら，自己と子どもの間に食い違いが生じた場合にはそれを協応させることが重要となるだろう。表１は，親が子どもに関して省察することと，自分自身に関して省察することを６つのパターンに分け，それぞれの省察の内容をまとめたものである。子どものことばかり気にしてた親（パターン２）や，自己中心的な親（パターン３）が，だんだん両方の立場に立って考え直せるようになっていく様子をこのような図式で描くことができる。

第三に，省察の３層モデルでは，各省察レベル内のメカニズムを明確に示せるので，親の子育てにおける

表１．子育てにおける親自身に関する省察（PR）と子どもに関する省察（CR）パターン

パターン		省　　察
1		親自身に関する省察も子どもに関する省察も行わない。
2		子どものことに関しては振り返る。
3		親自身のことに関しては振り返る。
4		親自身と子どもの両方に関して別々には省察できるが，相互関連性についての認識はもたない。
5		子育てにおける特定のことに関しては，親子相互の視点を同時に考慮しながら省察することができる。
6		子どもの成長を通して自分を振り返ったり，自分のことを振り返ることによって子どもへの影響を考えたりするなど，子育て全般にわたり親子相互の視点を協応させながら省察することができる。

認知スタイルの差異を明らかにすることができる。子育てにおける親の認知過程を探る従来のアプローチやモデルでは，関連する多数の概念間の差異が不明確であったため，子育て支援のための手がかりや原因を特定することが難しかった。親のモニタリングに関する先行研究では親の子どもに対する高いレベルのモニタリングが，子どもの問題行動の予防に直接つながることを明らかにしているが（Dishion & McMahon, 1998; Pettit, Laird, Dodge, Bates, & Criss, 2001），親自身に視点をおくことや，育児情報からの気づき，他の人との交流を通じた認識などを取り入れた研究は少ない。また，Crouter & Head（2002）が指摘しているように，子どもや青年の非行防止における家庭のプロセスとして親のモニタリングが重要であるけれども，測定尺度と概念構造のラベルのミスマッチングが多い。省察の３層モデルを利用し概念の違いを明確にすることによって，実際の認知過程に即した尺度の作成および調査が可能になるであろう。

さらに，上記のような利点から，Schön（2001）のいう行為中のその場の省察なのか，抽象度の高い価値観のゆらぎを生じる省察なのか等を，特定して説明することができると思われる。また，親の自己モニタリングと，子どもに対するモニタリング，他の人からの気づきを通じた省察のそれぞれの個人差が，実際の育児場面でどう融合されていくのかが明らかになるであろう。省察における個人差を表すことは，子育て支援においても各々の親の情報レベルと省察レベルに応じた適切な対応ができることを意味する。ひいては，保育者の資質向上のために行われている省察過程の再構築にも適用することができるだろう。具体的には，保育カンファレンスで使われる情報の性質と省察過程のレベル別に焦点化した議論とそれに対応した評価が可能となると考えられる。

そのためには，今後，省察過程を支えるような条件についても検討していく必要があるだろう。特に，内的要因の一つである感情に関して，梶田（1987）は，認知的要素のレベルには具体的で個別的な体験を基にした感情的な機制が働き，経験の受容や意味づけに影響を与えていると述べている。したがって，現段階の省察の３層モデルでは，感情は他の出来事とともに認知の対象としてしか扱うことができないので，今後は，認知過程内の感情の働きも組み込んだものに発展させていく必要があるだろう。

以上のように，省察の３層モデルを洗練させるためには，構成概念および関連概念のさらなる検討が欠かせない。日常的な育児において省察を行っている親と，自分の子育て観や価値観まで省察の対象として振り返ることができる親の違いは，認知的な統制の個人差から生まれるのだろうか。パターン化・固定化しがちな価値観が大きく変わることはあるのだろうか。あるとすれば，どのようなきっかけによってどのような過程で変わるのだろうか。また，親の省察過程において，他者とのコミュニケーションと育児情報は，どのような役割をしているのだろうか。今後，これらのことを明らかにすることによって，子育ての認知過程に関して問題を抱えている親に対して，適切な支援が可能になると考えられる。

本稿では，親の認知に関する研究を概観するとともに省察の３層モデルを提案した。省察の３層モデルは，省察過程のダイナミックスと，省察における情報を水準ごとに説明し，知覚から価値観にわたる省察の厳密な記述と検証を行うことを可能にする。今後，モデルに基づいて省察の構成概念をさらに精緻化し関連要因も整理することにより，子育て支援において役立つ知見が得られるような実証的研究を進めていくとともに，子育て認知における改善プログラムの開発など実証的研究に取り組んでいく必要がある。

【引用文献】

Bugental, D. B. (1992). Affective and cognitive processes within threat-oriented family systems. In I. E. Sigel, A. V. McGillicuddy-DeLisi, & J. J. Goodnow (Eds.), *Parental belief systems: Psychological consequences for children*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bugental, D. B. (1993). Communication in abusive relationships: Cognitive constructions of interpersonal power. *American Behavioral Scientist*, **36**, 288–308.

Bugental, D. B., Blue, J., & Cruzcosa, M. (1989). Perceived control over caregiving outcomes: Implications for child abuse. Developmental Psychology, **25**, 532–539.

Chilcoat, H. & Anthony, J. C. (1996). Impact of parent monitoring on initiation of drug use through late childhood. *American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **35**(1), 91–100.

Chilcoat, H. D., Dishion, T. J., & Anthony, J. C. (1995). Parent monitoring and the incidence of drug sampling in urban elementary school children. *American Journal of Epidemilogy*, **141**(1), 25–31.

Crouter, A. C. & Head, M. R. (2002). Parental monitoring and knowledge of children. In Marc H. Bornstein

(Ed.) *Handbook of Parenting vol.3. Being and becoming a parent*. Lawrence Erlbaum Associates, 461-483.

Crouter, A. C., MacDermid, S. M., McHale, S. M., & Perry-Jenkins, M. (1990). Parental monitoring and perceptions of Children's school performance and conduct in dual- and single-earner families. *Developmental Psychology*, **26**(4), 649. 657.

Dishion, T. & McMahon, R. J. (1998). Parental monitoring and the prevention of child and adolescent problem behavior: A Conceptual and empirical formulation. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **1**(1), 61-75.

Fonagy, P. (1996). The Significance of the development of metacognitive control over mental representations in parenting and infant development. *Journal of clinical psychoanalysis*, **5**(1), 67-101.

Gibbs, G. (1988). *Learning by Doing: A guide to teaching and learning methods, Further Education Unit*. Oxford Polytechnic.

Goodnow, J. J. & Collins, A. W. (1990). *Development according to parents: The nature, sources, and consequences of parents' ideas*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Grusec, J. E., Rudy, D, and Martini, T. (1997). Parenting cognitions and child outcome: An overview and implications for children's internalization of values. In J. E. Grusec and L. Kuczynski (Eds.), *Parenting and children's internalization of values(A handbook of contemporary theory)*. New York: John Wiley & Sons, Inc., 259-282.

Hayes, L., Hudson, A., & Matthews, J. (2003). Parental monitoring: A Process model of parent-adolescent interaction. *Behaviour Change*, **20**(1), 13-24.

Hayes, L., Hudson, A., & Matthews, J. (2004). Parental monitoring behaviors: A model of rules, supervision, and conflict. *Behavior Therapy*, **35**, 587-604.

井上芳世子（2003）．母親としての発達に関する研究の展望－葛藤場面に注目して－　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部，**52**，227-230.

梶田正巳（1987）．学習・指導体験と発達（下）　児童心理，７月号，131-141.

菅野幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ　発達心理学研究，**12**(1)，12-23.

Kerr, M. & Stattin, H. (2000). What parents know, how they know it, and several forms of adolescent adjustment: Further support for a reinterpretation of monitoring. *Developmental Psychology*, **36**(3), 366-380.

窪田庸子（2002）．母親のメタ認知促進による母娘関係の改善－カウンセラーとの会話の語用論的ビデオ分析の結果－　社会環境研究，**7**，47-58.

Lazarus, R. S. & Folkman, S.（1991）．ストレスの心理学：認知的評価と対処の研究（本明寛・春木豊・織田正美，監訳）．東京：実務教育出版．（Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. N.Y. : Springer Publishing Company.）

Main, M. (1991). Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. In J. Stevenson-Hinde, & C. Parkes, P. Harris (Eds.) *Attachment Across the Lifecycle*. New York: Routledge.

McCord, J. (1986). Instigation and insulation: How families affect antisocial aggression. In J. Block, D. Olweus, & M. R. Yarrow (Eds.) *Development of Antisocial and Prosocial Behavior*. New York: Academic Press.

宮内佳緒里（1998）．省察過程における保育者の意識について．日本保育学会第50回大会発表論文集，604-605.

朴信永・杉村伸一郎（2006）．子育て研究の動向と展望　幼年教育研究年報，**28**，99-107.

Peterson, L., Ewigman, B., & Kivlahan, C. (1993). Judgments regarding appropriate child supervision to prevent injury: The role of environmental risk and child age, *Child Development*, **64**, 924-950.

Pettit, G. S., Laird, R. D., Dodge, K. A., Bates, J. E., & Criss, M. M. (2001). Antecedents and behavior-problem outcomes of parental monitoring and psychological control in early adolescence. *Child Development*, **72**(2), 583-598.

Sampson, R. J. & Laub, J. H. (1994). Urban poverty and the family context of delinquency: A new look at structure and process in a classic study. *Child Development*, **65**, 523-540.

Schön, D. A.（2001）．佐藤学・秋田喜代美（訳）専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える－ゆみる出版（Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.）

Stattin, H. & Kerr, M. (2000). Parental monitoring: A Reinterpretation. *Child Development*, **71**(4), 1072-1085.

高橋勝子（1998）．保育の場における保育臨床性と発達援助のあり方を探る．日本保育学会第51回大会発表論文集，578-579.

氏家達夫・高濱裕子（1994）．３人の母親－その適応過程についての追跡的研究－．発達心理学研究，**5**，123-136.

Weintraub, K. J., & Gold, M. (1991). Monitoring and delinquency. *Criminal Behavior and Mental Health*, **1**, 268-281.

安見克夫・秋田喜代美・鳥井亜紀子・小林美樹・寺田清美（1997）．１年間の保育記録の省察過程（1）．日本保育学会第50回大会発表論文集，280-281.

吉村香・吉岡晶子・尾形節子・田代和美（1996）．保育者の成長における実践と省察．日本保育学会第49回大会発表論文集，112-113.